

神戸山手大学シニア50+（フィフティプラス）

入学制度への取りくみ

On Kobe Yamate University's Admission System —— For those who are over 50 ——

福 原 栄 太 郎

はじめに

神戸山手大学には平成11年に開学して以来、何人かのオーバーエイジ学生が社会人学生として入学・編入し、卒業していった。大人の目には不作法に映る若い学生達の中にあって、黙々と学び、そして感謝の気持ちを表して巣立って行かれたシニアの卒業生に、教員としていかほどのことが出来たのか。内心忸怩たる思いを心の底に抱いていた。おそらくそのような思いは筆者一人のものではなかったはずである。

小稿は本学におけるシニア学生の受け入れと、2年度にわたってシニア学生の導入教育に携わった経験を記録し、今後の参考に供しようとするものである。なお、同制度によって入学した学生が現役であるため、場合によっては不愉快に感じられる記述があるやも知れない。また、必要最小限にとどめた記述もあるし、現在進行中の学年については細かくふれ得ない。詳細な分析については他日を期したいと思う¹。

なお、シニア学生は広い意味で社会人入学生の範疇にはいるが、小稿では特に一定の高年齢によって区分された「シニア50+」入学制度による入学生をそのようによぶこととする。

1. シニア教育導入のいきさつ

本学は開学当初をのぞけば、新設小規模大学の通例に漏れず、学生数の確保が慢性的な問題であり、筆者がかかわった多くの会合では常に議論となったところである。

平成17年9月、新聞各紙に関西国際大学が平成18年度よりシニア世代の学生を受け入れるとの記事が掲載された。本学評議会でもこの話題が取り上げられ、その是非が俎上にのぼり、シニア世代学生の好印象、一般学生に与える好影響が語られたが、受け入れ態勢にまで及ぶ話しには至らなかった。

一方、すでに日本私立大学協会は平成17年度より私立大学発展構想委員会において「シニア世代の受入れ推進に関する研究協議会」を開催し検討を進め、平成17年11月、「シニア世代の

学び・生きがい・交流の場としての大学づくり」と題するレポートをまとめ、「元気なシニア」を積極的に大学に取り込むことが、キャンパスを活気づける効果が期待できると分析していた。これは、いわゆる団塊の世代が平成19（2007）年に一斉に退職時期を迎えるこの世代の定年後と、志願者の減少に頭を悩ませる大学とを結びつけたものであった。関西国際大学におけるシニア世代の受け入れもこれとかかわるものであろう。

平成18年11月13日、東京・市ヶ谷のアルカディア市ヶ谷で開催された、「シニア世代の受け入れ推進に関する研究協議会」（以下、研究協議会と略す）において前記レポートを中心に、119大学が参加して研究・協議が行なわれた。

趣旨は多岐にわたったが、

- ① 大学には教育・研究に加えて社会貢献（再教育機能）が求められており、そこには社会人の養成とシニア世代の受け入れが含まれる。
- ② 団塊の世代が60歳の定年を迎えるが、シニアを積極的に私立大学へ取り込むことが、今後の発展の鍵となる。また、新しい大学像をつくるという意味でも、シニア世代の受け入れは様々な可能性が潜在している。
- ③ シニア世代受け入れのために、入学試験や三年次編入学試験、科目等履修生制度などの受け入れやすい条件及び学びやすい環境づくり、学修生相談センターの設置などきめ細かい対応が必要。
- ④ 関西国際大学から、60歳を対象にし、10名のシニア学生が学んでいる。シニアの経験・体験が、学生に親や教員との関係とは異なる関係を作り出し、良い影響を与えるなどの期待ができる。シニアを再び地域に戻すために地域との関係づくりを積極的に推進する。

など、具体的な活動状況の事例が説明された。

これらの全てに得心がいったわけではないが、少子化傾向が続き、学生確保の面から一定数のシニア層の受け入れは社会的な養成からみても歓迎すべき事であると考え、筆者は他大学における同様の制度を参照しシニア入学制度を検討した。その結果、評議会などでの話し合いを通じて次のような内容で制度化することとなった。

- i 制度の名称：当初は「シルバー」などという案もあったが、シルバーカレッジなど市民大学と混同のおそれがあるところから、上級の意味がある「シニア」を採用。「シニアフィフティプラス（50+と略す）」としたのは、下記の年齢と関連する。
- ii 対象年齢：対象を上記研究協議会のいう団塊世代の定年退職者をとすると60才以上となるが、それでは制度自体が団塊世代が去った後は継続しがたくなる。また、定当該世代の女性には専業主婦も多く、定年退職者という発想は男性中心ではないか。むしろ生涯教育という観点からとらえ、生活に一区切りが付き人生を改めて考える世代を対象とするならば、それは子育ての終わったころと考えられる。以上の点から50才以上を対象とした。

- iii 入学試験方法：志望者のニーズと本学の教育内容に齟齬をきたさないことをめざし、AO方式とし、事前の面談に力を入れるようにした。
- iv 奨学金制度：シニア世代とはいえ、すべて経済的に余裕があるとは考えにくい。また、金額についても他学の例で参考になるものは少ない。数字的な根拠はないが、学校が授業料を負担しても良いとおもえるような学生に来て欲しいという思いが込められて半額免除となった。
- v カリキュラム：本学にはすでに編入学制度、社会人入学制度があり、その制度での入学生もいること。シニアに特化したカリキュラムを作り、特別待遇することの是非が議論され、本学のアドミッションポリシーを理解してもらった上で、一般学生と同様のカリキュラムで学んでもらうこととなった。ただし、1年次の基礎ゼミで行っている一律的な内容が、社会人に対しては適合しない面もあるため、1年次にシニア入学生用のゼミナールを設ける。

2. シニア学生を受け入れて

平成20年度13名ⁱⁱ、平成21年度16名のシニア学生の入学をみたⁱⁱⁱ。平成21年10月現在2学年25名が在籍している。

2-1. 年齢・男女比

表1 入学時年齢

*は中途退学者数を含む

		50～54	55～59	60～64	65～69	70才以上	計
男性	H20	1名	1名	3名*	1名		6名
男性	H21	2名	1名	2名			5名
女性	H20	2名	1名	2名	2名		7名
女性	H21	1名	4名	3名*	1名	1名	10名
	計	6名	7名	10名	4名	1名	28名

表1は、平成21年度入学生のうち、入学直後に病気退学した1名を除いた28名の入学時における年齢構成を示したものである。

男女比は男性11名に対して女性17名でおよそ4：6とやや女性が多い。年齢構成は50代13名に対して60代以上15名とほぼ拮抗している。これを男女別にみると、男性は50代5名に対して60代6名、女性は50代8名に対して60代以上9名となり、男女による違いは見られない。

この年齢構成によつてうかがえることは、必ずしも本学におけるシニア入学制度は、当初研究協議会が予測し目論んでいた2007年の団塊世代定年退職者の受け皿とはなっていないといえることである。確かに、年代別集計では60～64才までの年齢層が10名と最も多いが、退学者も3名あり、他の年齢層との差は絶対的なものではない。

本学に先行してシニア学生の受け入れを開始した関西国際大学における「シニア特別選考」は、研究協議会の予測通り団塊世代定年退職者をターゲットとして対象を60才以上としているが、平成18年度に10名（うち3名は3年次編入）あった入学者は、同19年度に5名（うち2名は3年次編入）、20年度に2名（うち1名は3年次編入）となっている^{iv}。これは、対象を団塊世代の男性と想定したことに問題があったとは考えられないだろうか。

本学の動向から見ると、成人にはもともと大学への進学を志望している層が存在し、従来の若年層を対象とした入学制度ではその希望がかなえられなかったと考えられる。

2-2. 志望動機

シニア50+の制度をどのようにして知ったかという質問に対して、圧倒的に多かったのが、新聞による報道および広報であり、電車の吊り広告をみてというのがこれに次ぐ。それらのメディア媒体をみたときに、なにが彼、彼女たちを大学進学へと駆り立てたのだろうか。ある学生は、記事を見た瞬間に「これだ」と思ったと語り、ある学生は、電車でオープンキャンパスの広報をみたその足で山手大学を訪れたと回想している。

入学後にとったアンケートの志望動機を分析すると次のようになる。

表2 シニア学生の入学志望動機

志望動機	学問志向	教養志向
男 性	7名	4名
女 性	7名	8名
計	14名	12名

一人一人の志望動機は必ずしもシンプルに割り切れるものではなく、また文章化され表面に現れたものからしか判断できないが、その動機は表2のように学問志向と教養志向の二つに分けることが出来ると思う。

学問志向には、環境や都市、あるいは心理学を学びたいといったものから、次のステージへのステップアップ、新しい学問領域へのチャレンジ、などと答えたものを含み、大学生生活への憧憬、自己を見つめる、人生を豊かにしたいなどと答えたものを教養志向としてくくった。

これらの志望動機は、その後の彼、彼女たちの学びの真摯さをみると、大学・教員はおろそかにすることは出来ない。彼、彼女たちは人生の限られた貴重な時間を大学に託しているのである。

3. シニアゼミの試み

3-1. ゼミ運営の方針

一人一人の志望動機を尊重しながらも、本学としてシニア学生教育の目的を明確にする必要

がある。この点について十分な議論が尽くされたとは思っていないが、これまでの制度設立の話し合いによって教育目的を、次の2点にしぼり、その実現に向けて1年次に必要と思われるプログラムを作成し、実践を試みた。

- ① 社会人の持てる技能・知識・経験を若年学生に伝承させ、本学教育環境に良好な影響を及ぼすこと。
- ② 「学び直し」によって再教育を受けた人材を、社会に還元する。

具体的には、

- A 複数のプロジェクトを設定し、問題解決的なテーマ学習をすすめる。
- B 学齢期学生に対する理解を深めるため、また学生ニーズの高い心理学などについての知的充足度を高めるため、学内外の講師を招き特別講義を開く。
- C それぞれ長年異なった世界で生活し、経歴、環境、年齢の違うシニア学生の相互理解を深め、連帯感をもたせ、居心地の良い学生生活環境を整える。

こととした。

3-2. 人間関係についてのトレーニング

学生相互のコミュニケーション、およびグループ活動の意義、リーダーシップのあり方については、初期の5講時をあて、教材を使用して学んだ。学生相互の良好な人間関係形成が、次のミニプロジェクト活動の正否を握ると考えたからである。また、講義時間以外に毎月1度のゼミ行事を設定し、さらにオープンキャンパスや大学祭などの行事にも積極的に参加した。これも良好な人間関係の形成に寄与した。

3-3. ゼミ行事

一日も早くうちとけるため、また親睦を深める目的で毎月1回の行事の実施を提案し、実施した。4月のみ筆者が設定し、5月からは月行事当番が企画し運営した。

- | | | | |
|-----|------------------------------------|----|--------------------|
| 4月 | 山辺の道散策 | 5月 | 「花緑と歴史街道を歩こう」ハイキング |
| 6月 | 森林公園 | 8月 | 伊吹山ハイキング・ゼミ旅行（屋久島） |
| 10月 | 学外講師を交えての夕食会 | | |
| 11月 | 月心寺の精進料理・奈良正倉院展見学・大学祭へ屋台を出店し参加・食事会 | | |
| 12月 | クリスマス会 | 2月 | ゼミ旅行（赤穂） |

など、の行事が実施され学生生活の楽しさを味わうことが出来た。

3-4. ミニプロジェクト

5月の段階で本学の課題であり学科名ともなっている環境と交流をキーワードとして各人より研究テーマを募り、プロジェクトチームを作って研究を進めることとした。

a 中央区の公園 b 大学食堂の食育の2テーマに分かれて1年をかけて研究し発表した。この過程において、アンケート調査の技法や図書館の利用、様々な方面との折衝など、学問を進めていく上で必要な技法もあわせて習得できたのではないだろうか。

3-5. 学外講師による特別講義

シニア学生を対象として学外講師をまねき特別講義を実施した。内容は、あらためて若者たちと日常的に接することとなったシニア学生の若者理解に役立つものと、グループ活動によって一人一人の役割を認識するために資するものを選んだ。

9月27日 現代社会とポスト青年期 ー大人になることの意味の変貌ー

10月4日 メディアと同調様式 以上、富田英典 関西大学教授

10月25日 11月1日 リーダーシップを学ぶ 以上、白樫三四郎 大阪大学名誉教授

3-6. その他の活動

1. ゼミ活動の記録を残すため、HP作成と、その基礎作業となるデータを大学PCのフォルダに保存することを試みた。
2. 役割分担を定め上級学年でのゼミ活動や社会で活動する際の参考となるよう配慮した。
プロジェクトリーダー オープンキャンパス担当 HP管理運営 ゼミ旅行担当
月行事担当
3. 毎授業の内容、および感想をワープロソフトで書いてもらい、そのファイルをメールに添付して提出してもらったこととした。短いコメントを返信し、教師ー学生間のコミュニケーションをとった。仕事などでPCを使用していた人を除くと、ほとんどがPC初心者であり、初歩の手ほどきが必要であったが、PC上級のシニア学生の援助もあり、全員がメールでのやりとりが出来るようになった。

以上の内容についての評価は、現時点では控えたい。ただ、予測されたことではあるが、盛りだくさんな内容となり、1時限の時間内にはおさまらず、受講生には負担となったことであろう。

4. シニア入学制度の問題点

さいわいなことに、3年目に向けてひきつづき志願者があり、本学のシニア50+の制度は社会の一定の評価を得そうである。これは、他学の同様な制度が必ずしも順調な展開を見せていない中で、大切にしていかなければならないことである。

そのために必要と思われる点を記しておこう。

4-1. 位置づけをはっきりさせる

シニア学生は、身分は学生であっても社会で十分に通用してきた大人である。必要以上に意

識することもないが、教職員の対応もこれまでの若者と同じというわけにはいかない。

カリキュラムこそ一般の学生と同じであるが、一律同様と言うわけにはいかない。履修指導や進路指導など、就職を前提とした現在の指導のあり方は、見直す必要が出てくるであろう。例えば、平成20年度入学学生の一人が途中で大学院へとキャリアアップさせたことは良い参考になる。さらに学問を深めたいと考えているシニア学生の存在も考えておかななくてはならない。

4-2. シニア学生のパワーを学内様々な場面で活用

授業に熱心に取り組む姿勢は、一般学生の手本である。シニア学生が入ることによって学生たちの授業態度が格段に良くなったとの評判であるが、他学においても好影響をおよぼしていると同様の評価がある。

社会人としての豊かな経験から得られたマナーや態度が一般学生に自然に浸透していくことは望ましい姿であるが、大学という狭い社会で過ごしてきた私たち教職員へも好影響を期待するのは望みすぎであろうか。

今後、シニア学生が上級学年へ進んだときに、期待に添えるようなプログラムを用意するとともに、様々な活動場面にシニア学生のパワーが活かされるよう配慮を願いたい。

5. 今後の展望

5-1. 収容人数

シニア学生の定員は社会人入学20名の中に含まれており、それを越えることはないが、全体の学生数の中でどの程度が適正であるのかを考えておく必要がある。

シニア学生は当然の事ながらキャリアも違えば、学生相互の年齢差もおおきい。ひとりひとりを理解しながら教室を運営するには、基礎ゼミを担当した経験から、一人の教員で担当できるのは10数名が限度と考える。

2007年5月2日の読売新聞によれば、本学と同規模の愛知文教大学（国際文化学部定員150名）では、完成年度（2001）から定員割れが続き、2007年度の在 student 数368人中、シニア学生が73人。一般学生は166人、中国人を中心とした留学生が129人と2割がシニア学生がしめるという。その記事で、3年生の男子学生が「年配者に教えられることも多いが、本音を言えば、同世代の学生たちが少ないのは寂しい」と述べていることが心に残っている。同記事で同大学の坂田学長は「大学は本来、青年たちを社会に送り出す教育の場。それで定員が埋まり、さらにシニアを迎え入れるのが理想。しかし、結果的に、シニア学生は、定員割れ対策としての意味を持つようになった」と語っていることは、心しておかねばならない。

5-2. 多様なシニア学生

本制度を導入した時点で、たまたま年齢を50才以上と設定したが、シニア学生像は研究協議

会と同様「退職した団塊世代」であり、子育てを終えた主婦までが想定内であった。しかし、現実には、ステップアップのための中途退職者、在職のまま進学してきた方、80才を超えてなお向学心溢れる志願者など多様な学生が登場している。

また、学歴も高卒、短大卒、四大卒、大学院修了と多様である。かかる学歴の違いは知識量の差以外にも大学生活への適応力の差などともあらわれてくる。

これら多様なシニア学生とどのように向き合うのか、「長期履修制度」やPCなどの技術習得に対するシニア向けプログラム、シニアのパワーを結集させるプロジェクトなど今後考えることは多い。ただ、現状では学内の教育体制は十分整えられているとは言えない。少なくとも、シニア学生教育に関する情報を共有する場を早急に設ける必要がある。

おわりに

基礎ゼミのシニアクラスを担当したときから、記録をまとめることを念頭に置いてきた。そのため、学生の提出したレポートや行事の記録、写真など必要と思われるデータの蓄積には心を用いてきたつもりである。しかし、実際に文章化する段になってシニア学生が在籍している段階で纏めるには支障が生じてきた。むしろ、ひとりひとりのシニア学生のなまの声を届ける方策を考えるべきだったかもしれない。文章化することをお約束し、支援して頂いた各位には申し訳ないが詳細は他日を期すこととして擱筆したい。

注釈

- i シニア教育プログラムに関しては、関西国際大学による「現代GPプロジェクト」平成18年度採択「大学、住民及び行政等の協働と地域活性化～シニア学生受け入れモデルとサービスラーニングモデルの開発～」の『平成19年度報告書』『平成20年度報告書』が刊行されている。小稿がその成果に多くおっていることを明記し、謝意を表したい。
- ii 1名は21年度前期をもって退学し、22年度より国立大学大学院へ進学する。
- iii 平成21年度の入学生のうち1名は入学直後に発病、2名は仕事との両立が困難（事前面談の不備が原因と考えられる）でやむを得ず退学。今後の反省点である。
- iv 注 i 『平成20年度報告書』
- v http://chubu.yomiuri.co.jp/kyoiku/chubu_kyo/chubu_kyo070502.htm